

一組 五場面

作者は、えびフライは全部食べられるし、おいしいということも伝えたかった。だから、祖母には歯がないという風に設定することで、祖母がむせてしつぽをはき出すというシーンを作り、えびフライのおいしさを伝えるようにした。

金森さん

作者は、主人公たちの普段の生活と、えびフライの土産と、父の帰省しているときの生活を比べて、父のあたたかいところや、たまにそろう家族団らんの様子を書いている。

まるまる一段落えびフライのうまさを伝えるために文を区切ったり、えびのしつぽを食べてしまった祖母がむせるという場面を設定したことで、主人公たちがえびフライのことをあまり知らずに食べて、そして予想通りとてもまいということが分かる場面になっている。

姉と主人公がしつぽを食べているところからも、えびフライはかなりおいしかったのだと分かる。

藪さん

作者は、父親が寝ずに帰ってきたえびフライのおいしさを読者に伝えたかった。だから、歯がない祖母でもしつぽを食べてしまうほどおいしいと思わせたかった。でも、歯がない祖母はむせてしまい、小皿に出してしまった。しつぽを食べようとしたことを強調するために、このように作者は設定した。

竹本さん

☆ 作者は、歯がない祖母でもしつぽを食べたいと思えるくらいえびフライはおいしいと言いたかった。それは、味だけでなく、家族がお互いに思い合っている今の空気がいいと思いい、おいしいと思わせたのだというのを伝えるために、むせる場面を設定した。

後藤さん

主人公は、念願のえびフライを口にしたとき、一度も味わったことのない食感が漂っていた。そして、父親は久しぶりの雑魚を急いで食べている。また、えびフライのしつぽを食べた祖母がむせた場面を書いたのは、(主人公があまりにもおいしいものだったので忘れて食べてしまったのもあるとは思いますが) 父親が眠りを惜しんで持ってきたえびを一部でも残してはいけなさと感じさせるために、作者はこのような場を設定した。

馬場君

☆ 作者は、えびフライがどれだけ貴重な物か、えびフライに対する思い、そしておいしさを伝えるために、わざとえびフライのしつぽで祖母をむせさせたと思う。祖母がむせる場面から、そこで主人公と姉がしつぽは食べないことを初めて知ったことが分かる。このように細かい部分もちゃんと伝えるために、このように設定した。

近藤さん

作者は、えびフライのしつぽを普通は食べないことを、父親の口からではなく、祖母がえびのしつぽでむせるということで表すように設定した。主人公は、えびフライのしつぽを食べないことを知ったが、あまりにもおいしかったから、姉に同調してえびフライのしつぽを食べてしまった。

萩巣君